

## メッセージアウトライン

### マタイ 28 : 1~15 「イエス・キリストの復活」

[1]週の初めの日(日曜日)の明け方、マグダラのマリヤとほかのマリヤが墓に来た。彼女たちはイエスの死体に香料のはいった油を塗ろうとしてやって来たのである。(マルコ 16:1~2)

[2-7]主の使い(御使い、天使)の出現

主の使いが天から降りて来て、墓の入り口にふたをしてあった大きな石を転がして座ったので大きな地震が起こった。主の使いの顔はいなずまのように輝き、その衣は雪のように白かった。これを見たローマの番兵は恐ろしさのあまり震え上がり、死人のようになった。主の使いはマグダラのマリヤたちに三つのことを語った。

1. 「恐れてはいけません」

主なる神はご自分を信じる者に対して、恐れのままにほうっておかれるようなことはしない。必ず「恐れるな」と声をかけてくださるのである。→マタイ 14:24~27 ローマの番兵にはそのように語っていないことに注意。

2. 「イエスは前から言っておられたようによみがえられた」

これはイエスが弟子たちといっしょにおられた時に、たびたび言っておられたことである。→マタイ 12:40, 26:32 主の使いは「来て納めてあった場所を見てごらんなさい」と言う。もちろんそこは空であった。イエスは日曜日の朝、その預言どおりに死よりよみがえられたのである。

3. 弟子たちへの伝言

①「イエスが死人の中よりよみがえられたこと」

これはイエスの死よりの復活が預言の成就であり、神の救いの完成であり、死からの勝利であるということを経験した彼女たちに、そして他の弟子たちのうちに確かなものとするためであった。このイエスの死と葬りとよみがえり、言い換えれば十字架と復活こそがキリスト教の、そして聖書の中心なのである。

②「弟子たちより先にガリラヤへ行かれ、彼らはそこでイエスとお会いできること」→10節

[8-10]復活のイエスの現れ

大喜びで弟子たちに知らせに行った彼女たちの前に突然、復活の主イエスが現れ、彼女たちに「おはよう」と言われた。彼女たちは近寄ってイエスの足を抱き、拜んだ。イエスの体は幽霊のようなものではなくちゃんと復活の体を持っておられた。ここでイエスは彼女たちの礼拝を受け入れておられることに注意。イエスが人間や天使のような存在ならば、即座に「私を拜んではいけない」と言ったであろう。なぜなら被造物を拜むことは偶像礼拝となるからである。ユダヤ人たちはそのことをよく知っていた。→出エジプト記 20:4~5(十戒の第二戒) このことから教えられることは、イエスはまぎれもなく正真正銘の神であるということである。

人となられた神 → ペリピ 2:6~11

この方による以外に救いはない。人間や他の被造物は礼拝の対象にならないし、救うこともできない。このイエス・キリストの死と復活は私の罪の贖いのためであったと信じる者は、その罪を赦され救われるのである。

そしてイエスは弟子たちの故郷でもあり、イエスが福音宣教を始められた地でもあるガリラヤにもう一度弟子たちを集めて、福音宣教の使命を託そうとされるのである。

[11-15]イエスの復活に関する出来事を、番兵たちがエルサレムに来て、すべて祭司長たちに報告した。その結果どうなったか。彼らは涙を流して悔い改めたか。そうではなく、その反対であった。彼らはローマ兵たちを金で丸め込み、嘘の理由を付けて空の墓のつじつま合わせをしたのである。人間の心の恐ろしい頑なさ、罪の現実の姿がここにある。彼らは真理よりも現在の名声、地位、財産、権力のほうが大事なのである。私たちは心頑ななユダヤ人のようにならずに、すなわち聖書のみことばを信じ、イエス・キリストの死よりの復活は私たちの罪の贖いの完成であったことを知り、心からの感謝と賛美をささげる者になりたい。